

## 妙法蓮華經。安樂行品。第十四

爾の時に文殊師利法王子菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、  
 世尊、是の諸の菩薩は甚だ爲れ有り難し。佛に敬順した  
 てまつるが故に大誓願を發す。後の惡世に於て是の法華經を護持  
 し讀誦し説かん。世尊、菩薩摩訶薩後の惡世に於て云何してか能  
 く是の經を説かん。

佛、文殊師利に告げたまわく、

若し菩薩摩訶薩後の惡世に於て是の經を説かんと欲せば、當  
 に四法に安住すべし。

一には菩薩の行處・親近處に安住して、能く衆生の爲に是  
 の經を演説すべし。

文殊師利、云何なるをか菩薩摩訶薩の行處と名くる。若し  
 菩薩摩訶薩忍辱の地に住し、柔和善順にして卒暴ならず、心  
 亦驚かず、又復法に於て行ずる所なくして、諸法如實の相を觀  
 じ、亦不分別を行ぜざる、是れを菩薩摩訶薩の行處と名く。

云何なるをか菩薩摩訶薩の親近處と名くる。菩薩摩訶薩、國王  
 ・王子・大臣・官長に親近せざれ。諸の外道・梵志・  
 尼犍子等、及び世俗の文筆・讚詠の外書を造る、及び  
 路伽耶陀・逆路伽耶陀の者に親近せざれ。亦諸の有ゆる凶戲  
 の相掎相撲、及び那羅等の種種變現の戲に親近せざれ。又  
 旃陀羅、及び猪・羊・雞・狗を畜い、畋獵・漁捕する諸の  
 惡律儀に親近せざれ。是の如き人等或時に來らば、則ち爲に法  
 を説いて希望する所なかれ。又聲聞を求むる比丘・比丘尼・  
 優婆塞・優婆夷に親近せざれ、亦問訊せざれ。若しは房中に於  
 ても、若しは經行の處、若しは講堂の中に在つても、共に  
 住止せざれ。或時に來らば宜しきに隨つて法を説いて悌求する

所なかれ。文殊師利、又菩薩摩訶薩、女人の身に於て能く欲想を生ずる相を取つて、爲に法を説くべからず、亦見んと樂わざざれ。若し他の家に入らんには、小女・處女・寡女等と共に語らざれ。亦復五種不男の人に近づいて以て親厚を爲さざれ。獨他家に入らざれ。若し因縁あつて獨入ることを須いん時には但一心に佛を念ぜよ。若し女人の爲に法を説かんには、齒を露わにして笑まざれ、瞽臆を現わさざれ。乃至法の爲にも猶お親厚せざれ。況や復餘の事をや。樂つて年小の弟子・沙彌・小兒を畜えざれ。亦與に師を同じゅうすることを樂わざれ。常に坐禪を好んで閑かなる處に在つて其の心を修攝せよ。文殊師利、是れを初の親近處と名く。

復次に菩薩摩訶薩、一切の法を觀するに空なり、如實相なり、顛倒せず、動せず、退せず、轉せず、虚空の如くにして所有の性なし。一切の語言の道斷え、生ぜず、出せず、起せず、名なく、相なく、實に所有なし。無量・無邊・無礙・無障なり。但因縁を以て有り、顛倒に従つて生ず。故に説く、常に樂つて是の如き法相を觀ぜよと。是を菩薩摩訶薩の第二の親近處と名く。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言く、

若し菩薩あつて 後の惡世に於て

無怖畏の心をもつて 此の經を説かんと欲せば

行處及び親近處に入るべし

常に國王 及び王子 大臣・官長 凶險の戲者

及び旃陀羅 外道・梵志を離れ

亦増上慢の人 小乘に貪著する

三藏の學者に 親近せざれ

破戒の比丘 名字の羅漢 及び比丘尼の 戲笑を好む者

深く五欲に著して 現の滅度を求むる

諸の優婆夷に 皆親近することなけれ

是の若き人等 好心を以て來り

菩薩の所に到つて 佛道を聞かんとせば

菩薩則ち 無所畏の心を以て

希望を懷かずして 爲に法を説け

寡女等・處女 及び 諸の不男に

皆親近して 以て親厚を爲すことなけれ

亦屑兒・魁膾毆獵・漁捕

利の爲に殺害するに 親近することなけれ

肉を販つて自活し 女色を銜賣

是の如きの人に 皆親近することなけれ

凶險の相撲 種種の嬉戲

諸の姪女等に 盡く親近することなけれ

獨屏處にして 女の爲に法を説くことなけれ

若し法を説かん時には 戲笑すること得ることなけれ

里に入つて乞食せんには 一りの比丘を將いよ

若し比丘なくんば 一心に佛を念ぜよ

是れ則ち名けて 行處・近處とす

此の二處を以て 能く安樂に説け

又復 上中下の法

有爲・無爲 實・不實の法を行ぜざれ

亦是れ男 是れ女と分別せざれ

諸法を得ず 知らず見ず

是れ則ち名けて 菩薩の行處とす

一切の諸法は 空にして所有なし

常住あることなく 亦起滅なし

是れを智者の 所親近處と名く

顛倒して 諸法は有なり無なり

是れ實なり非實なり 是れ生なり非生なりと分別す

閑かなる處に在つて 其の心を修攝し

安住して動ぜざること 須彌山の如くせよ

一切の法を觀ずるに 皆所有無し

猶お虚空の如し 堅固なることあることなし

不生なり不出なり 不動なり不退なり

常住にして一相なり 是れを近處と名く

若し比丘あつて 我が滅後に於て

是の行處 及び親近處に入つて

斯の經を説かん時には 怯弱あることなけん

菩薩時あつて 靜室に入り

正憶念を以て 義に隨つて法を觀じ

禪定より起つて 諸の國王

王子・臣民 婆羅門等の爲に

開化して演暢して 斯の經典を説かば

其の心安穩にして 怯弱あることなけん

文殊師利 是れ菩薩の初の法に安住して

能く後の世に於て 法華經を説くと名く

又文殊師利、如來の滅後に末法の中に於て是の經を説かんと

欲せば、安樂行に住すべし。若しは口に宣説し若しは經を讀

まん時、樂つて人及び經典の過を説かざれ。亦諸餘の法師を

輕慢せざれ。他人の好惡長短を説かざれ。聲聞の人に於て亦

名を稱して其の過惡を説かざれ。亦名を稱して其の美きを讚歎

せざれ。又亦怨嫌の心を生ぜざれ。善く是の如き安樂の心を

修するが故に、諸の聽くことあらん者其の意に逆わじ。難問する所あらば小乗の法を以て答えざれ。但大乘を以て爲に解説して一切種智を得せしめよ。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

菩薩常に樂つて 安穩に法を説け

清淨の地に於て 牀座を施し

油を以て身に塗り 塵穢を澡浴し

新淨の衣を著 内外俱に淨くして

法座に安處して 問に隨つて爲に説け

若し比丘 及び比丘尼 諸の優婆塞 及び優婆夷

國王・王子 群臣・士民あらば

微妙の義を以て 和顔にして爲に説け

若し難問することあらば 義に隨つて答えよ

因縁・譬諭をもつて 敷演し分別せよ

是の方便を以て 皆發心せしめ

漸漸に増益して 佛道に入らしめよ

嬾惰の意 及び懈怠の想を除き

諸の憂惱を離れて 慈心をもつて法を説け

晝夜に常に 無上道の教を説け

諸の因縁 無量の譬諭を以て

衆生に開示して 咸く歡喜せしめよ

衣服・臥具 飲食・醫藥

而も其の中に於て 希望する所なかれ

但一心に 説法の因縁を念じ

佛道を成じて 衆をして亦爾ならしめんと願うべし

是れ則ち大利 安樂の供養なり

我が滅度の後に 若し比丘あつて

能く斯の 妙法華經を演説せば

心に嫉恚 諸惱障礙なく 亦憂愁及び 罵詈する者なく

又怖畏し 刀杖を加えらるる等なく

亦擯出せらるることなけん 忍に安住するが故に

智者是の如く 善く其の心を修せば

能く安樂に住すること 我が上に説くが如くならん

其の人の功德は 千萬億劫に

算數譬諭をもつて 説くとも 盡くすこと能わじ

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て、斯の經典を受持し讀誦せん者は、嫉妬・諂誑の心を懷くこ

となかれ。亦佛道を學する者を輕罵し、其の長短を求むること

なかれ。若し比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の聲聞を求むる者

・辟支佛を求むる者・菩薩の道を求むる者、之を惱まし其れをし

て疑悔せしめて、其の人に語つて、汝等道を去ること甚だ遠

し、終に一切種智を得ること能わじ。所以は何ん、汝は是れ

放逸の人なり、道に於て懈怠なるが故にと言ふこと得ることな

れ。

又亦諸法を戲論して諍競する所あるべからず。當に一切

衆生に於て大悲の想を起し、諸の如來に於て慈父の想を起

し、諸の菩薩に於て大師の想を起すべし。十方の諸の大

菩薩に於て常に深心に恭敬・禮拜すべし。一切衆生に於て平等

に法を説け。法に順ずるを以ての故に多くもせず少くもせざ

れ。乃至深く法を愛せん者にも亦爲に多く説かざれ。

文殊師利、是の菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於

て、是の第三の安樂行を成就することあらん者は、是の法を説

かん時、能く惱亂するものなけん。好き同學の共に是の經を

讀誦するを得、亦大衆の而も來つて聽受し、聽き已つて能く持ち、持ち已つて能く誦し、誦し已つて能く説き、説き已つて能く書き、若しは人をしても書かしめ、經卷を供養し、恭敬・尊重・讚歎するを得ん。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

若し是の經を説かんと欲せば 當に嫉・恚・慢  
諂誑・邪偽の心を捨てて 常に質直の行を修すべし  
人を輕慢せず 亦法を戲論せざれ

他をして疑悔せしめて 汝は佛を得じと云わざれ  
是の佛子法を説かんに 常に柔和にして能く忍び  
一切を慈悲して 懈怠の心を生ぜざれ

十方の大菩薩 衆を愍むが故に道を行ずるに  
恭敬の心を生ずべし 是れ則ち我が大師なりと  
諸佛世尊に於て 無上の父の想を生じ  
憍慢の心を破して 法を説くに障礙なからしめよ

第三の法是の如し 智者守護すべし  
一心に安樂に行ぜば 無量の衆に敬われん

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て、法華經を受持することあらん者は、在家・出家の人の中に於て大慈の心を生じ、菩薩に非る人の中に於て大悲の心を生じて、是の念を作すべし、是の如き人は則ち爲れ大に如來の方便隨宜の説法を失えり。聞かず知らず覺らず、問わず信ぜず解せず。其の人は是の經を問わず信ぜず解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、隨つて何れの地に在つても、神通力・智慧力を以て、之を引いて是の法の中に住することを得せしめん。

文殊師利、是の菩薩摩訶薩如來の滅後に於て此の第四の法を成就することあらん者は、是の法を説かん時、過失あることな

けん。常に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・王子・大臣・人民・婆羅門・居士等に供養・恭敬・尊重・讚歎せらるること  
 を爲ん。虚空の諸天、法を聽かんが爲の故に亦常に隨侍せん。若し聚落・城邑・空閑・林中に在らんととき、人あり來つて難問せんと欲せば、諸天晝夜に常に法の爲の故に而も之を衛護し、能く聽者をして皆歡喜することを得せしめん。所以は何ん、此の經は是れ一切の過去・未來・現在の諸佛の神力をもつて護りたもう所なるが故に。

文殊師利、是の法華經は無量の國の中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況や見ることを得、受持し讀誦せんをや。

文殊師利、譬えば強力の轉輪聖王の、威勢を以て諸國を降伏せんと欲せんに、而も諸の小王其の命に順わざらん。時に轉輪王種種の兵を起して往いて討伐するに、王、兵衆の戰うに功ある者を見て即ち大に歡喜し、功に隨つて賞賜し、或は田宅・聚落・城邑を與え、或は衣服・嚴身の具を與え、或は種種の珍寶・金・銀・瑠璃・碑磔・碼碯・珊瑚・琥珀・象馬・車乘・奴婢・人民を與う。唯譬中の明珠のみを以て之を與えず。所以は何ん、獨王の頂上に此の一つの珠あり。若し以て之を與えば、王の諸の眷屬必ず大に驚き怪まんが如く、文殊師利、如來も亦復是の如し。禪定・智慧の力を以て法の國土を得て三界に王たり。而るを諸の魔王肯て順伏せず。如來の賢聖の諸將之と共に戰うに、其の功ある者には心亦歡喜して、四衆の中に於て爲に諸經を説いて其の心をして悦ばしめ、賜うに禪定・解脫・無漏根・力の諸法の財を以てし、又復涅槃の城を賜與して、滅度を得たりと言つて其の心を引導して皆歡喜せしむ。而も爲に是の法華經を説かず。

文殊師利、轉輪王の諸の兵衆の大功ある者を見ては心甚だ歡喜して、此の難信の珠の久しく譬中に在つて妄りに人に與えざるを以て、今之を與えんが如く、如來も亦復是の如し。三界の



中に於て大法王たり。法を以て一切衆生を教化す。賢聖の軍の五陰魔・煩惱魔・死魔と共に戦うに大功勳有つて、三毒を滅し、三界を出でて魔網を破するを見ては、爾の時に如來亦大に歡喜して、此の法華經の能く衆生をして一切智に至らしめ、一切世間に怨多くして信じ難く、先に未だ説かざる所なるを而も今之を説く。

文殊師利、此の法華經は是れ諸の如來の第一の説、諸説の中に於て最も爲れ甚深なり。末後に賜與すること、彼の強力の王の久しく護れる明珠を、今乃ち之を與うるが如し。

文殊師利、此の法華經は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て最も其の上にある。長夜に守護して妄りに宣説せざるを、始めて今日に於て乃ち汝等がために而も之を敷演す。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

常に忍辱を行じ 一切を哀愍して

乃ち能く佛の讚めたもう所の 經を演説す

後の末世の時に 此の經を持たん者は

家と出家と 及び非菩薩とに於て

慈悲を生ずべし 斯れ等是の經を

聞かず信ぜず 則ち爲れ大に失えり

我佛道を得て 諸の方便を以て

爲に此の法を説いて 其の中に住せしめん

譬えば強力の 轉輪の王兵の戦うて功あるに

諸物の象馬・車乘 嚴身の具

及び諸の田宅 聚落・城邑を賞賜し

或は衣服 種種の珍寶

奴婢・財物を與え 歡喜して賜與す

如し勇健にして 能く難事を爲すことあるには

王髻中の明珠を 解いて之を賜わんが如く

如來も亦爾なり 爲れ諸法の王

忍辱の大力 智慧の法藏あり  
 大慈悲を以て 法の如く世を化す  
 一切の人の 諸の苦惱を受け  
 解脱を欲求して 諸の魔と戦うを見て  
 是の衆生の爲に 種種の法を説き  
 大方便を以て 此の諸經を説く  
 既に衆生其の力を 得已んぬと知つては  
 未後に乃ち爲に 是の法華を説くこと  
 王髻の 明珠を解いて 之を與えんが如し  
 此の經は爲れ尊 衆經の中の上なり  
 我常に守護して 妄りに開示せず  
 今正しく是れ時なり 汝等が爲に説く  
 我が滅度の後に 佛道を求めん者  
 安穩にして 斯の經を演説することを得んと欲せば  
 應當に是の如き 四法に親近すべし  
 是の經を讀まん者は 常に憂惱なく  
 又病痛なく 顔色鮮白ならん  
 貧窮・卑賤 醜陋に生れじ  
 衆生見んと樂うこと 賢聖を慕うが如くならん  
 天の 諸の童子 以て給使を爲さん  
 刀杖も加えず 毒も害すること能わじ  
 若し人惡み罵らば 口則ち閉塞せん  
 遊行するに畏れなきこと 師子王の如く  
 智慧の光明 日の照すが如くならん  
 若し夢の中に於ても 但妙なる事を見ん  
 諸の如來の 師子座に坐して  
 諸の比丘衆に 圍繞せられて説法したもうを見ん  
 又龍神 阿修羅等  
 數恒沙の如くにして 恭敬合掌し  
 自ら其の身を見るに 而も爲に法を説くこと見ん

又諸佛の身相金色にして  
無量の光を放つて一切を照し  
梵音聲を以て諸法を演説し  
佛四衆の爲に無上の法を説きたもう  
身を見るに中に處して合掌して佛を讚じ  
法を聞き歡喜して供養を爲し  
陀羅尼を得不退智を證す  
佛其の心深く佛道に入れりと知しめして  
即ち爲に最正覺を成ずることを授記して  
汝善男子當に來世に於て  
無量智の佛の大道を得て  
國土嚴淨にして廣大なること比なく  
亦四衆あり合掌して法を聽くべしとのたもうを見ん  
又自身山林の中に在つて  
善法を修習し諸の實相を證し  
深く禪定に入つて十方の佛を見たてまつると見ん  
諸佛の身金色にして百福の相莊嚴したもう  
法を聞いて人の爲に説く常に是の好き夢あらん  
又夢むらく國王と作つて宮殿・眷屬及び  
上妙の五欲を捨てて道場に行詣し  
菩提樹下にあつて師子座に處し  
道を求むること七日過ぎて諸佛の智を得  
無上道を成じ已り起つて法輪を轉じ  
四衆の爲に法を説くこと千萬億劫を經  
無漏の妙法を説き無量の衆生を度して  
後に當に涅槃に入ること煙盡きて燈の滅ゆるが如し  
若し後の惡世の中に是の第一の法を説かば  
是の人大利を得んこと上の諸の功德の如くならん